

2017年10月8日

福音書からのメッセージ

農夫たちは、その息子を見て話し合った。
『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。』
(マタイによる福音書 21 章 38 節)

聖書には、さまざまなたとえ話が出てきます。そこにはぶどう園など、当時の生活の中で馴染みのある舞台が多く登場します。さらに旧約聖書を見ていくと、イスラエルはしばしばぶどう園にたとえられており、今日の内容はイエス様がイスラエルの民を批判し、彼らはぶどう園、つまり天の国から追い出されると警告されていると気づかされます。しかしそれだけで終わってよいのでしょうか。

聖書は今を生きるわたしたちにも語り掛けてくる書物です。この世界がぶどう園であったなら、わたしたちは神さまからぶどう園の管理を任された農夫だといえると思います。しかしわたしたちは、このぶどう園のたとえの農夫同様、神さまから遣わされた僕を追い返しているのではないのでしょうか。

わたしたちは自分たちが持っているもの、お金や名誉、土地や財産、家族、自然、そして自分の命さえも、自分で得たものだと勘違いしてしまいます。確かに努力はしたでしょう。歯を食いしばったことも、涙を流したことだってあったと思います。しかし一からすべて、自分で得たのではないのです。

ぶどう園のたとえの中で、主人は垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立てました。農夫にぶどう園を貸す前に、準備を万全にしていました。わたしたちに対してもそうです。裸で生まれたわたしたちに、神さまはすべてのものを与えてくださいました。しかしわたしたちは全部、自分のものだと考え、僕が来ても、また神さま



の息子が来たとしても、拒絶してしまう。否定してしまうのです。

このぶどう園の農夫は、わたしたちの姿です。わたしたちは神さまに様々なものの管理を任されています。でもそれらのものを自分のものとして

握りしめてしまい、神さまにお返しすることができないのです。そしてついにはイエス様までも否定し、追いやってしまう、それがわたしたち人間の姿です。

でもそんなわたしたちを、神さまは見捨てませんでした。最後に遣わされた息子、イエス様は確かに十字架によって殺されてしまいます。しかしその捨てられたものが、「隅の親石」となります。隅の親石とは家の土台です。基礎です。復活されたイエス様は、わたしたちの歩みを支えてくれるものとなってくれるのです。

わたしたちは本当に弱いものです。自分の力だけでは、神さまのみ心にそった生き方などできません。しかし、イエス様が支えてくれるから、土台としていつも導いてくれるから、わたしたちは生きることができるようではないのでしょうか。

そして、ぶどう園で収穫を得、たくさんの人たちと分かち合うのです。そこにはイエス様も共にいてくださいます。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>